

2. 研究の詳細

プロジェクト名	中国清代から近代に至る「読書」と「歴史」の関係の研究		
プロジェクト期間	平成27年度		
申請代表者 (所属講座等)	竹元 規人 (国際共生教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	なし
<p>①研究の目的</p> <p>申請者は、平成23～26年度科学研究費による研究により、長い歴史を誇る中国において、1920年代以降、伝統的な古代史叙述の真実性を疑い、近代的な歴史研究を目指した「疑古派」、主にその代表的学者である顧頡剛(こけつこう、1893生、1980没)の学説につき、新史料を用いながら再検討を加えた。疑古派は、顧が編集した論文集『古史辨』(こしべん)の名から、『古史辨』派とも呼ばれる。従来の代表的研究としては、Laurence Schneider, <i>Ku Chieh-kang and China's New History: Nationalism and the Quest for Alternative Traditions</i>, University of California Press, 1971, 王汎森『古史辨運動的興起——個思想史的分析』允晨文化実業公司, 1987年, 等がある。申請者の研究の結果、顧の史学学説・思想には、前近代、とりわけ直前の時代である清代の学術(清朝考証学)からの継承発展が重要な役割を果たしていることをより重視すべきとの見通しを得た。そこで今後、清代から近代に至る、史学を中心とした学術的展開を見直す研究計画を立てている。</p> <p>本プロジェクトでは、新たに「読書」という学術的方法に焦点を当てて研究及び成果発表を行い、これまでの申請者の科学研究費等による研究と、今後の研究の円滑な接続を図ることを目的とする。</p> <p>②研究の内容</p> <p>申請者は、上記平成23～26年度科学研究費による研究の結果、清代から近代に至る学術の展開・転換が、「読書」という学問の方法の転換を核としていたのではないかと、いう着想を得ている。「読書」とは、単に本を読むということではない。清朝考証学において、「読書」の主たる対象は儒教の経書であり、「読書」を通じて、古聖人の示した「道」を明らかにすることを目的とした。二千年以上前の古書を対象とするため、「読書」はまず一文字一文字の読解から出発した。「読書」の結果は、多く経書注釈書の形で発表され、今日に伝えられている。他方、近代以降、儒教の聖人の「道」自体は知識人の目標とはされなくなり、代わって歴史的事実の探求が目指された。経書に即して注釈を編むのではなく、古書に制約・限定されない「歴史」の研究・編纂が進められたのである。</p> <p>顧頡剛は、最古の経書である『尚書』について、世界的に見ても最も稠密な注釈書を残すと共に、中国近代史学の創始者でもあった。では、顧にとって、清代以来の「読書」はいかにして「歴史」と結びつき、かつ転換・展開していったのか。これは近代の側から見た、「読書」と「歴史」の関係の問題である。他方、清代の側からは、史学方法論の先駆として近代以降注目された章学誠(1738生、1801没)の『文史通義』が注目される。『文史通義』は史学方法論の書として知られるが、実際にはより広義の文献学・目録学の書としても位置付けられるべきものであり、文献・書物と歴史の関係を考察する上で重要な意義を有し、本研究課題の観点から読解することができる。</p> <p>③研究の方法・進め方</p> <p>文献読解により上記の研究内容を進め、学会・研究会において成果発表を行った。途中、北京で資料調査を行うとともに、国内の他大学から必要な文献を相互貸借ないし複写により取り寄せた。</p>			

④実施体制

申請者個人により行い、共同研究者は置かなかった。

⑤平成27年度実施による研究成果

平成27年9月15日、申請者が共同研究員として参画している京都大学人文科学研究所の『『文史通義』研究班』において、同書「詩教下」篇の訳注を報告した。『文史通義』は世界的に注目され盛んに研究されている著作でありながら、これまで日本語で全体にわたる訳注は作成されていない。同篇において章学誠は、古の「詩」の在り方に立ち返って、『文選』など後世のジャンル分けが文の形式にとらわれたものであることを批判している。「詩教上」で章は「古に著述なし」という重要な指摘をし、戦国時代になって初めて著述が行われるようになった、と述べている。章は、累加し現存する膨大な文献の性質を根源的に再考し、整序し直そうとしたのであり、こうした姿勢が近代史学に重要な啓発を与えたと考えられる。

続いて平成27年10月11日、日本中国学会第67回全国大会（於國學院大學）において、「「読書」と「歴史」——顧頡剛の中国学術史上における位置について」と題して研究発表を行った。その要旨は次の通りであった（大会プログラムから転載）。

近代中国における学術の転換は、しばしば「経学」から「史学」へ、という命題によって要約される。この命題のコロラリーとして、学問の対象が経書を中心とした「書物」から、考古学的に発掘された、文字を伴わない遺物へと拡大していったことが、注目されてきた。そしてこの動きを象徴する出来事として、古書の価値を否定したり、「読書」に反対する主張などが取り上げられてきた。顧頡剛（1893—1980）は、紛れもなく中国近代史学の創始者の一人であるが、如上の学術の展開を前提とすると、顧の学問は文献考証に終始した、考古学によって乗り越えられるべき過渡的存在とされてしまう。

だが、中国近代学術についての如上の理解には次の問題がある。まず、当時の学術の当事者達は、中国の長い学術の歴史、とりわけ直前の時代であった清代の学術を、批判的に発展・更新することを目指しており、文献から考古学へというドラスティックな転換を想定することは、当事者の意識と異なる。他方、事実の問題としても、学術の展開において必ずしも内在的な連続の位相のみを重視すべきではないとしても、西洋近代から導入された新しい学問による大転換を強調すれば、一面的な理解に陥る危険がある。また、「読書」という営為は単に本を読むことではなく、清朝考証学の方法との関わりで理解されねばならない。

顧頡剛は、一九二〇年代から中国最古の史書としての『尚書』研究にライフワークとして取り組み、没するまで膨大な注釈・研究を残した。顧が経学としてではなく、史学として『尚書』研究を進めたことは言うまでもないが、ではその研究方法は、特に清代の学術をいかに更新しようとしたものだったのか。顧は、『尚書』を読むことで、いかにして「歴史」に至ろうとしたのだろうか。本発表では、この問題を考察することで、顧の学術史上の位置を明らかにし、かつ中国近代学術の展開について、より公平な理解を目指す。

顧が1960年代に取り組んだ「尚書大誥訳証」（『顧頡剛古史論文集』巻10）は、前編が「尚書本子総録」（版本研究）、本編上が「語言和文字的整理」（校勘と解釈）であり、ここまでの「読書」、本編下が「歴史之部——周公東征史事考証」であり「歴史」に相当する。このことから、顧は清朝学術で追求された「読書」と、近代学術において主要な課題となった「歴史」の探究とを、接続・統合しようとしていたのではないかと指摘した。

その後、報告内容を論文としてまとめるために研究を継続したが、その過程で、顧が『尚書』注釈に際

し、『尚書』のテキストの文法的特質に着目していることを重視すべきと考えるに至った。この観点から、改めて清代以降の言語学・文法学の展開について調査を進めているところである。

⑥今後の予想される成果（学問的効果、社会的効果及び改善点・改善効果）

研究内容に即した学問的効果としては、本研究を展開させていくことで、中国の前近代から近代への学術展開過程について、新たな見方を示すことが期待できる。この場合の「学術」とは、前近代の側からの枠組みであり、現在の分類では人文学に相当すると言える。前近代、特に清代から近代にかけての人文学は、今日の人文学にとって基礎となるものであり、その展開過程について新たな見方を示すことで、今日の中国に関する諸学に方法的示唆を与えることが期待できる。

また、中国学の分野では、前近代と近代は別々に研究される傾向があるが、より長期にわたり、時代を連続的・横断的に研究することによって、従来の研究以上に統合的・俯瞰的見解を得ることが期待できる。

社会的効果としては、本研究は中国の文献をいかに学術的資料として扱っていくかという方法的問題を考察したものであり、今日の学校諸教科において、中国の文献それ自体、ないしそれから得られる情報が教えられていることから、それら文献の扱い方に関して再考した本研究は、教材研究の参考となることが期待できる。

⑦研究の今後の展望

⑤で述べた研究報告について、今後も改訂を進め、訳注・論文として発表する。

また、本研究によって得られた知見や見通しに基づいて、科学研究費等外部資金を申請し、研究を展開していきたい。

具体的には、本研究は顧頡剛という歴史家に即してその学術の方法を考察したものであったが、今後は清代から近代に至る学術展開過程をより太い流れとして把握するために、対象となる人物や文献を拡大していきたい。

⑧主な学会発表及び論文等

「『読書』と『歴史』——顧頡剛の中国学術史上における位置について」日本中国学会第 67 回全国大会（於國學院大學），平成 27 年 10 月 11 日